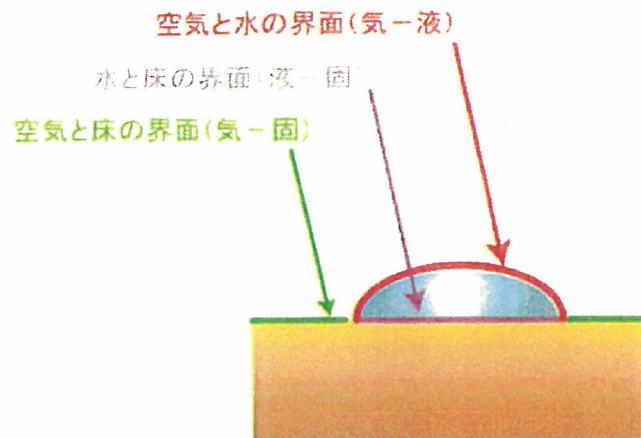


【第5回】そもそも「界面」って何だろう？

さて、根本的なことですが、「界面」というのは何でしょう。化学的に言いますと、混じらずに接している2つの物質の「境目（さかいめ）」ということになるでしょう。

界面科学（化学）は、英語では「interface science(chemistry)」です。コンピュータ用語のインターフェイスはどの辞書でもよく出てきますが、新編英和活用大辞典（研究社）で「interface」を引くと、一つには「接触部分」という日本語が充てられています。界面科学的には、この表現がぴったりではないでしょうか。

例えば、私たちの顔と空気との境目も、広い意味では「界面」言えるでしょう。床に水をこぼしたときに、床に水滴ができます。このとき、いくつの「界面」が存在するのでしょうか。



よく、「水と油」という言葉を使います。水と油を容器に入れると、2層に分かれて混じり合わないことから、相性が悪いという例えにされます。このときの水と油の境目も「界面」です。容器と水、容器と油にもそれぞれ「界面」があります。

(※全ての水と油が混じり合わないわけではありません。)

空気中の液体や固体の外側の部分は、一般的に「表面」という言葉を使いますので、「表面」は「界面」の中の1種と考えてください。

このように考えると、「界面」はこの世のありとあらゆる場所に存在します。「界面」では色々な現象が起こります。界面を維持しようとする力がはたいたり、互いに溶け合おうとしたり、また、別の物質が入ることで、それらが妨げられたり、促進されたりします。これら界面での現象を利用することで、生活に役立っていることが沢山あります。

ごく当たり前の生活の中で、界面現象を伴わないものは少ないと言えます。科学が発達していなかった時代の人々は、無意識に界面科学を利用していたことでしょう。

界面科学の世界

[アプリケーションデータ、文献、JIS規格、ISO](#)

[界面科学理論](#)

[身近な界面科学](#)

